

## 67 秋山 半井澄(一八四七—一八九八)

—京都府療病院長・医学校長・医師会創始者

藤田<sup>1)</sup> 俊夫・半井<sup>2)</sup> 英江

半井澄(さやか)は弘化四年(一八四七)福井藩医の家に生まれた。半井は橘井の名家である。幼名を環(たまき)、元瑞(げんずい)と改め、のち澄と改称、秋山と号した。

江戸に出て松本良順の門に入った。十六歳の時藩主松平慶永(一春嶽 一八二八—九〇)の命で長崎のポンペにオランダ医学を学び、またフルベッキについてドイツ語を習った。さらに十八歳でボードイン、マンسفエルド、ハラタマについて医学を修め精得館当直医となった。マンسفエルドとは、のち明治九年(一八七六)京都で再び相見える事となる。

彼は蒲柳の質ながら熱血の人であった。慶応四年(一八六八)戊辰の役で軍陣医療に盡くした(二二歳)。明治三

年(一八七二)、東京藩邸の春嶽(三二歳)のもとに勤めたが、兵部省の命で軍事病院医官(月俸六〇円)となった。しかし藩庁は解任を要請、半井は福井病院主務兼医校の助教となり医学生教育と病院拡充に努めた(本学所蔵の履歴書による)。

明治四年(一八七二)文部中助教(月俸五〇円)に任ぜられ大阪病院のエルメレンスの下で勤務、翌五年病院局長に昇進した。

四年十月、東京大学東校でホフマンのもと大助教(月俸七〇円)として勤務した。

翌年(一八七三)京都府の懇請に応じ療病院庶務兼通弁(月俸七〇円)として三代の外人教師らと運営管理にあたった。

彼は蘭・独医学を解したので、初代教師ヨンケル(オーストリア生れ、英国籍 初任月俸四五〇円、次年より五百円)の通訳もした。明治九年(一八七六)より旧師マンسفエルド(二代目・オランダ人)をよく補佐し、初代院長(月俸百円)、十一年(一八七八)には日本初の癲狂院長をも兼務した。

明治五年(一八七二)、府は南禅寺方丈を借りあげた。これが我が国精神病院の濫觴である。ヨンケルは精神医学の重要性を認識し、ピネルの“人道的な病者扱い”をしたのである。十年(一八七七)マンスフェルドは大阪に更迭、三代目シヨイベ(ドイツ人、月俸四百円)が着任した。明治十一年、コレラ流行のさい半井は府下の医師を指揮し防疫にあたった(院長月俸百五十円)。また地方衛生委員、医師試験委員をも歴任した。

明治十四年(一八八一)より十九年(一八八六)の間、京都府医学校長(準八等官 月俸一七〇円)を務めた。

明治五年假療病院開設直後の教育年限は三年であったが、明治十二年栗田口青蓮院より河原町広小路の現在地に移ったのを機に医学校は独立、十四年(一八八一)五年制(最初の一年は予科)の医学教育を行う事となった。

十五年、本学は大阪、名古屋と共に公立甲種医学学校に指定された。それは榎村正直(まさただ)知事(二代目)の京都文化都市政策のもと、萩原三圭京都府療病院医学校長と共に本学の存廃の危機にも耐え、公立医学専門学校から府立医大へ昇格の礎となった。

校長の任を果たした彼は明治十九年(一八八六)退職、二十一年(一八八八)私立東山病院を創設した。薬局、図書館を備えた近代病院である。そしてまた医師会の基礎を創ったのである。当時は医師のレベルも区々で正規の教育を受けた人は少なかったが、京都医事会社を経て二十二年(一八九〇)京都医会を発足させた。彼は初代会長に選ばれ、医制、医師の教育研修や看護教育の充実をはかり、京都医事新誌を発刊し医師会活動を推進した。また私立衛生試験所を創設し、近代医学の推進と検査技師、看護スタッフなどパラメディカルを養成し、また明治二十七年の日清戦役に際しては、赤十字社救護に盡した。

半井澄は幕末・明治初年より医療・医学教育・医政に身を捧げ、また事業家として活躍した。晩年、心不全・腎不全に悩みながらも職務にあたった。明治三十二年(一八九八)十二月十日、五一歳で死去した。日赤社長佐野常民は弔辞を寄せた。遺骸は南禅寺天授庵に葬られた。

1) (京都市藤田ペインクリニック)

2) (京都府医師会医学史研究会)